

プロソーシャルな道徳的判断に関する研究展望

二宮克美¹⁾ 宗方比佐子²⁾

道徳的判断の発達理論については、Piaget (1932) ならびにそれに続くKohlberg (1969) の理論が、多くの研究者により紹介され、広く知られている。特にKohlberg の理論は、青年期をも含み込んだ道徳性の発達過程を扱っている点で注目され、多くの研究を誘発し様々な観点から検討が加えられている。しかし、このKohlbergの道徳的判断に関する研究で取り扱われていないプロソーシャルな側面の道徳的判断の研究が、近年Eisenbergを中心として精力的に進められており、新しい研究の流れを形成しつつある。そこで本稿は、このEisenbergの提起しているプロソーシャルな道徳的判断の研究を中心に概観し、紹介するのが主なねらいである。

I プロソーシャルな道徳的判断の定義と発達レベル

1. プロソーシャルな道徳的判断の定義

Eisenberg - Berg (1979 b) は、「Kohlberg (1969) の提起した道徳的判断の発達理論は、罰、規則、法律、権威、形式的義務などの問題を含んだ道徳的ジレンマについての判断であり、禁止に方向づけられた (Prohibition oriented) 側面しか扱っていない」と指摘し、道徳性のポジティブな側面についての道徳的判断の研究が必要であると主張した。確かにKohlbergの例話では、被験者は禁止あるいは権威への造反と援助とのコンフリクトについての判断理由を問われており、純粋な意味でプロソーシャルな問題を扱っていない。

プロソーシャルな行動に関する道徳的な理由づけは、禁止に方向づけられた側面のそれとは異なった重要な道徳的判断の領域を構成するものと考えられる。なぜなら援助行動と禁止行動 (例えば盗みをしてはいけない、法

プロソーシャルな道徳的判断と禁止に方向づけられた道徳的判断との間にもなされるべきであるからである。実際、愛他性 (altruism) とか人間性に根ざした人道主義 (humanitarianism) を理解するためには、道徳的判断の禁止に方向づけられた側面よりもむしろプロソーシャルな側面での考え方を問題にした方がより適切であろう。

Eisenbergは前述した罰や規則、権威などが関連しない、あるいは強調されない文脈で、自己の要求と他者の要求が相対立する場面についての道徳的判断の研究を進めている。Eisenberg - Berg (1976) が使用した例話の一例を示そう。

「水泳が上手な青年ボブは、身体障害で歩けない子に水泳を教えて欲しいと頼まれました。水泳を練習すればこの子も足が強くなって、歩けるようになるかもしれないからです。この役をうまくやることができるのは、この町ではボブだけです。というのも、救助法を知っていて、水泳を教えたことがあるのはボブだけだからです。しかし身体障害の子を教えるとなると、仕事をして、学校へ行った残りのボブの自由な時間はほとんどなくなってしまいます。それにボブは、これから始まる何回かの重要な大会のために、できるだけ多く自分の水泳の練習をしたいと思っています。自分の自由時間を全部使って練習をしないと、ボブが大会で勝つチャンスは少なくなってしまうし、大学への奨学金や賞金も手にとることが難しくなります。

ボブはこの身体障害の子に水泳を教えることを引き受けるべきでしょうか。それはどうしてですか。」

この例話の中でボブが直面している問題は、相手のために自発的にある行動をとることが要求され、しかもその際、そのことによって外的な報酬を得ることが目的ではなく、むしろ自分の側にある程度の損失や犠牲を負わなくてはならないというものである。この例話からもわかるように、プロソーシャルな道徳的判断は、プロソーシャルな行動の例に見られるポジティブな正義 (positive justice) の側面についての道徳的判断を取り扱うものであると言えよう。

さて、このプロソーシャルな道徳的判断を研究する意

1) 現所属；愛知学院大学教養部講師

2) 名古屋大学大学院教育学研究科研究生

義は何であろうか。Eisenberg (1982) は、少なくとも次の4点で有益であると述べている。(1)いかに個人が行為者の親切さを概念化し、それを帰属しているかを明確にしうる。(2)子どものポジティブな行為を生じさせる認知的、意識的な動機づけの範囲を決定しうる。(3)プロソーシャルな行動を予測する。(4)道徳的判断に関して現存する理論や知識を検討し、修正する。

確かに、子どもがどのような行動をプロソーシャルなものとするか、またそのプロソーシャルな行動に対してどのような理由づけをするのかを発達的に検討することは、現在「思いやり」が声高に叫ばれている状況を鑑みれば、意味あることであろう。さらには、プロソーシャルな道徳的判断がプロソーシャルな行動とどう関係しているのかを検討することも、同様に重要であろう。これらの点に関する研究の現状については、本稿のⅡおよびⅢで述べよう。

2. プロソーシャルな道徳的判断の発達レベル

Eisenberg-Berg (1979 b) は、先のボブの例話に代表されるようなプロソーシャルな道徳的ジレンマに対する反応を、以下の22カテゴリー、および22カテゴリーを集約した10カテゴリーに分類している(括弧内はそのカテゴリーでの典型的反応例である)。

- ① 権威と罰に対する強迫的または神秘的考え方
 - 1 権威と罰に対する強迫的または神秘的考え方 (先生や親に叱られるから)
- ② 快楽的理由づけ
 - 2 实际的快楽的利得 (お礼がもらえるから)
 - 3 直接的互恵性 (次に困った時助けてもらえるから)
 - 4 親愛関係 (友達だから)
- ③ 快楽的でない実際主義
 - 5 快楽的でない実際主義 (もっと水泳の上手な人に教えてもらった方がいいから)
- ④ 他者の要求への関心
 - 6 他者の身体的物質的要求への関心 (足が不自由で歩けないから)
 - 7 他者の心理的要求への関心 (悲しいだろうから)
- ⑤ 人間性への言及と関心
 - 8 人間性への言及と関心 (困っている時はお互いさまだから)
- ⑥ 紋切り型の理由づけ
 - 9 善い人、悪い人といった紋切り型のイメージ (助けること(人)はいいこと(人)だから)
 - 10 善い行動、悪い行動といった紋切り型のイメージ (助けることは当たり前だから)

- 11 他者および他者の役割についての紋切り型のイメージ (頼まれたから)
- ⑦ 承認・対人志向
 - 12 周囲の人々からの承認と受容志向 (お母さんがほめてくれるから)
- ⑧ 明白な共感志向
 - 13 同情志向 (かわいそうだから)
 - 14 役割取得 (自分が相手の立場だったら助けてほしいから)
- ⑨ 内面化された感情
 - 15 単純な内面化された肯定的感情および行為の結果についての肯定的感情 (助けたら自分がほっとするから)
 - 16 自尊心や自分の価値に応えたことから生じる内面化された肯定的感情 (助けたら気分がよくなるから)
 - 17 行為の結果に対する内面化された否定的感情 (その子の身体障害の程度がひどくなったら後悔するから)
 - 18 自尊心の喪失や自分の価値に応えなかったことから生じる内面化された否定的感情 (助けてあげないと後で自分を責めなくなるから)
- ⑩ 抽象的で内面化された理由づけ
 - 19 内面化された法律・規範・価値志向 (助ける義務があるから)
 - 20 他者の権利への関心 (困っている相手の人にも生きる権利があるから)
 - 21 一般化された互恵性 (人々は互いに助け合った方がいいから)
 - 22 社会状況への関心 (みんなが助け合ったら社会はもっとよくなるから)

この22のカテゴリーに基づいて、Eisenberg (1982), Eisenberg, Lennon & Roth (1983) は次の6つの発達レベルを設定している。なお、カテゴリーと発達レベルとの関係は、表1に示すとおりである。

表1 カテゴリーと発達レベルとの関係

発達レベル	10カテゴリー	22カテゴリー
I	① ② ③	1 2 3 4 5
II	④	6 7
III	⑥ ⑦	9 10 11 12
IVa	⑤ ⑧	8 13 14
IVb	⑨	15 16 17 18
V	⑩	19 20 21 22

レベルⅠ；「快楽主義的・实际的」志向

道徳的な配慮よりむしろ利己的、实际的な結果に関心を持っている。「善い」行動とは、行為者自身の欲求や要求を満たすのに役立つ行動である。他者を助けるあるいは助けない理由は、自己への直接的な利益、将来の互惠性および好きな人あるいは必要な人への気づかいといった考慮である。

レベルⅡ；「他者の要求」志向

たとえ他者の要求が自分の要求と相容れなくても、他者の身体的、物質的、心理的要求に関心をよせる。この関心は、役割取得とか同情の言語的表明、罪悪感のような内面化された感情への言及といった明確なものではなく、ごく単純なことばで表現される。

レベルⅢ；「承認および対人的」志向ならびに「紋切り型」志向

善い人・悪い人あるいは善い行動・悪い行動の紋切り型のイメージ、他者の承認や受容といった考慮が、プロソーシャルに行動するかしないかということの理由に用いられる。

レベルⅣa；「共感的」志向

判断は、同情的な応答、役割取得、他者の人間性への気づかいといったものを含んでいる。あるいはまた、行為の結果に関連した罪悪感とかポジティブな感情を含んでいる。

レベルⅣb；移行段階

助けるあるいは助けない理由の根拠は、内在化された価値、基準、義務および責任性を含んだものであり、他者の権利や尊厳を守ることの必要性に言及する。しかし、これらは明確には述べられない。

レベルⅤ；強く内在化された段階

助けるあるいは助けない理由は、内在化された価値、基準や責任感に基づいており、個人と社会の契約上の義務を維持しようとする願望およびすべての人の尊厳、権利、平等についての信念に基づいている。自分自身の価値や受容した基準に従って生きることによる自尊心の維持に関連したポジティブあるいはネガティブな感情も、この段階を特徴づけている。

これら発達レベルの進行が年齢の上昇に伴って見られることが、横断的ならびに縦断的データによって明らかにされている。

Ⅱ 仮想的ジレンマにおけるプロソーシャルな道徳的判断の研究

1. プロソーシャルな道徳的判断の発達

プロソーシャルな道徳的判断の発達を検討するために、Eisenberg-Berg (1979 b) は、小学校2年生14名(男子9名、女子5名)、小学校4年生21名(男子11名、女子10名)、小学校6年生18名(男子11名、女子7名)、中学校3年生25名(男子12名、女子13名)、高校2年生22名(男子11名、女子11名)および高校3年生25名(男子12名、女子13名)の合計125名を対象に、4問からなるプロソーシャルな道徳的ジレンマについての調査を行っている。その結果、小学生の理由づけは、快楽主義的、紋切り型、承認および対人志向、他者の要求とラベルされた反応をする傾向が見られた。高校生は年少の者によって用いられた理由づけとともに、共感的あるいは抽象的で内在化された道徳的理由づけをかなり用いることが見られた。善い人・悪い人といった紋切り型のイメージや承認および対人志向の理由づけは年齢の上がるにつれ減少する一方で、共感的な気づかいや内在化された価値を反映する反応が年齢とともに増加することが見出された。そして、共感的な反応が初期のプロソーシャルな志向の発達に重要な役割を果たしていることが明らかにされた。

この研究で得られた知見と以前のKohlberg流の禁止に方向づけられた道徳的判断の研究結果との比較から、プロソーシャルな道徳的判断の発達過程は、Kohlberg流の道徳的判断のそれとは異なっているとEisenberg-Bergは主張している。というのは、この研究の被験者の誰一人として罰や権威志向の反応をプロソーシャルな道徳的理由づけに用いなかったこと、禁止に方向づけられた道徳的判断の研究(Kohlberg, 1969)で報告されている年齢よりも早い時期に紋切り型の理由づけがかなり見られたことなどからである。

この横断的研究に加え、Eisenberg-Berg & Roth (1980) は幼児期から学童期にかけてプロソーシャルな道徳的理由づけがどのような発達の変化をするかを描写するための縦断的資料を提供している。この研究において34名(男子18名、女子16名)の被験児は、3歳10ヶ月～5歳3ヶ月(平均4歳7ヶ月)の時点(Time 1)にプロソーシャルな道徳的判断の理由づけに関して調査を受け、18ヶ月後(Time 2)に再び同じ調査を受けた。2回の調査とも理由づけは4つの例話を用いて測られ、大きく分けて次の8カテゴリーにコード化された。権威および罰志向、快楽的、要求志向、实际的、紋切り型、承認および対人志向、役割取得、人間性への言及。各被験児にそ

それぞれのカテゴリーの要約得点が1点(まったく使われない)から5点(4つの例話全部で使われている)の範囲で与えられ、各被験児が使用した理由づけの主要な型も記された。

出現頻度の高かったカテゴリーの要約得点についての結果から、快楽的理由づけの使用は、Time 1からTime 2の間で有意に減少し、要求志向や承認志向の理由づけは増加することが示された。また、被験児の使用理由づけの主要な型に関しては、50%の者がTime 1からTime 2の間に快楽的理由づけから要求志向の理由づけへと変化し、逆の変化は3%にすぎないことが示された。これらの縦断的資料の分析結果から、要求志向の理由づけと承認志向の理由づけは快楽的理由づけよりも発達の進んだものであると結論されている。

プロソーシャルな道徳的判断の発達に関して、Eisenbergらは認知的発達理論に基づく発達のシーケンスを横断的研究の中で記述してきた。さらに、理由づけのシーケンスを確認するための縦断的研究が必要であるが、Eisenberg, Lennon & Roth (1983) は、Eisenberg & Roth (1980) の研究に引き続き、小学生初期から中期にかけてのプロソーシャルな道徳的判断の発達の变化を縦断的に検討している。被験児はEisenberg & Roth (1980) の研究に参加した33名(男子17名、女子16名)で、Time 2から18ヶ月後(Time 3)に、Time 1, Time 2と同様の調査が4つの例話を用いて行なわれた。例話に対する反応は全部で22のカテゴリー(実際に被験児の反応に見られたのは16カテゴリー)に分類され、各カテゴリーは1例話につき1点(全く使われない)から4点(使われた理由づけの主要な型)の範囲で配点された後、4例話を通して各カテゴリーの得点が合計された。さらにカテゴリー得点に基づきレベルの合成得点が計算された。カテゴリーからレベルへの換算は、レベル値*にそのレベルの出現頻度を重みづけすることによりなされた。例えば要求志向50%、快楽主義25%、承認志向25%の被験者の合成得点は、 $(50 \times 2) + (25 \times 1) + (25 \times 3) = 200$ である。

以上の手続きによって得られたTime 1, Time 2, Time 3のデータに対して、年齢的变化を検討するための統計的検定が行なわれた結果、調査時期の主効果は有意であったが、性別の主効果ならびに性別×調査時期の

* 権威と罰の理由づけ = 0, 快楽的理由づけ = 1, 要求志向 = 2, 承認および対人的志向, 紋切り型 = 3, 自己内省的共感あるいは内在化された理由づけ = 4, というのが、この論文で用いられているレベル値である。

交互作用は有意でなかった。そして、快楽的理由づけはTime 1からTime 2にかけて有意に減少し、Time 2からTime 3にかけても減少すること、要求志向の理由づけはTime 1からTime 2とTime 2からTime 3にかけて有意に増加することが示された。

これらの縦断的データによれば、小学校入学前後の時期に、プロソーシャルな道徳的判断に発達の变化が見られた。即ち、7~8歳までの間に要求志向の理由づけの増加と快楽的理由づけの減少が生起する。これらの結果はプロソーシャルな道徳的判断における共感的理由づけの役割が年齢とともに増加することを示唆し、共感性とプロソーシャルな行動との関係が年齢とともに明確になるという知見(Underwood & Moore, 1982)と一致している。さらに、快楽的理由づけの役割が減少することから、小学生の時期における道徳性の発達の主要な変化は、自己志向から他者志向への移行にあることを示唆するものであろうと述べている。

いずれにせよ、上述した横断的ならびに縦断的研究の結果に基づいて、前節で述べた6つの発達レベルを提起しているのである。

この発達レベルについて、日本の子どもを対象に追試、検討した研究として、宗方・二宮(1985)のものがある。被験者は保育園年中児、小学校1年、3年および5年生、中学校1年生と3年生、高校2年生の各学年男女それぞれ10名ずつ計140名であった。手続きはEisenbergらの研究になるべく近いかたちでなされ、4問のプロソーシャルな道徳的ジレンマが用いられた。結果は、プロソーシャルな道徳的判断に関しては、顕著な年齢差、男女差は見られず、ほとんどの者がプロソーシャルな判断をするというものであった。プロソーシャルな理由づけに関しては、大きく分けた10カテゴリーについて見た場合、約半数のカテゴリーには年齢に対応する差異はみられないが、残りの半数(他者の要求への関心、紋切り型、明白な共感志向、内面化された感情、抽象的で内面化された理由づけ)では、高次のカテゴリーになるほど、高い年齢で出現数の増える傾向にあることが明らかにされた。さらに発達レベルに関しては、レベルIとIIは年齢とともに減少、レベルIIIとIVaは一度増加しその後減少、レベルIVbは小5になって出現し、その後増加するという傾向がうかがわれた(図1)。全般的には、Eisenbergによって提起されたプロソーシャルな道徳的判断の発達レベルが、日本の児童・青年にも見られることが明らかにされている。

2. 仮想的ジレンマにおける登場人物の要因

道徳的判断に関するほとんどの研究において、理由づ

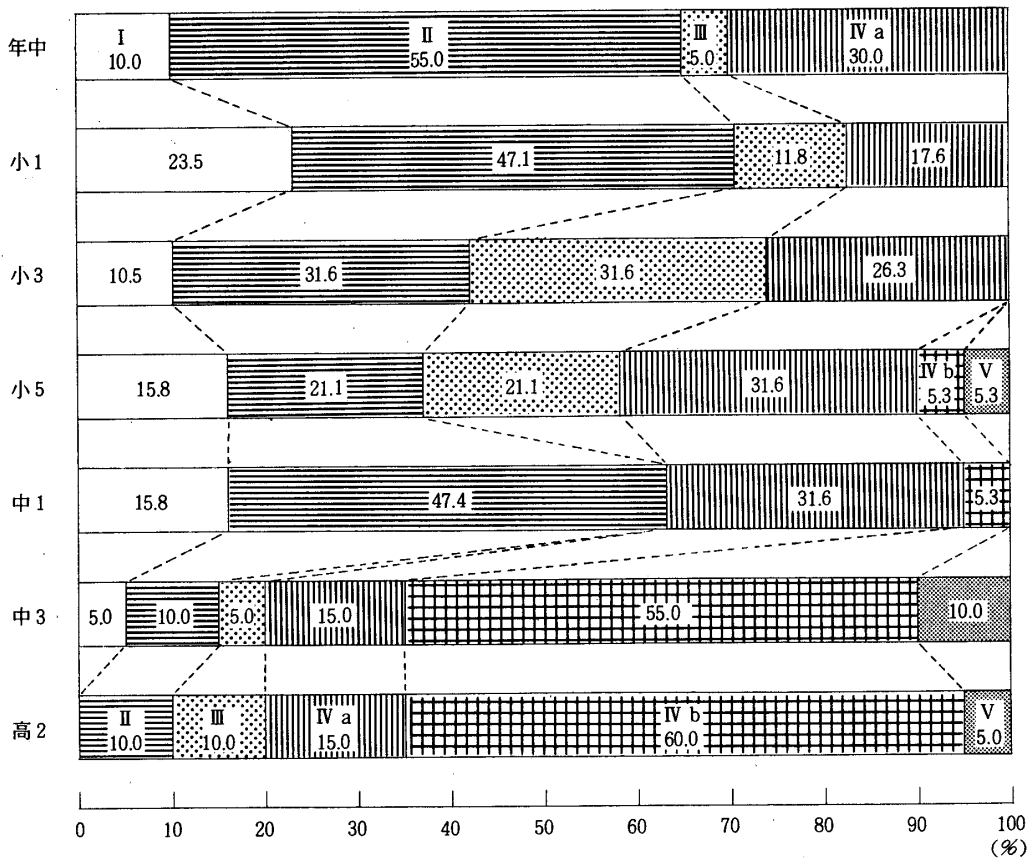


図1 発達レベルの学年別分布 (宗方・二宮, 1985)

けは仮想的な道徳的ジレンマに対してなされているが、提示される仮想場面の特質を様々に変化させることによって、道徳的判断も変化するのかどうかは興味深い問題である。この問題を扱ったEisenbergの研究として、ここでは2編の論文を取りあげる。1つは、「子どもの道徳的判断、自己状況と他者状況：援助のために被る損失と登場人物への同一視の効果」と題するEisenberg-Berg & Neal (1981)であり、もう1つは「子どもによる被援助者の差別」と題するEisenberg (1983)の論文である。前者は仮想的ジレンマの主人公が自分自身である場合（自己状況）と第三者の場合（他者状況）とで、子どもの理由づけが異なるかどうかを検討しており、後者は仮想的ジレンマの中で助けを求めている人を様々に変化させ、援助に関する子どもの差別の個人差と発達変化を調べたものである。以下に詳しく紹介する。

Eisenberg-Berg & Neal (1981)は2つの実験を行なっている。実験1では、4歳～5歳1ヶ月の子ども47名を対象として、プロソーシャルな道徳的ジレンマ3例話に対する理由づけを調査した。その際、子どもの約半数には自分と同じ性の主人公が登場する他者状況の例話を用い、残りの子どもには自己状況を設定するため「この話をあなたのことだとして」とし、主人公の名前

に「○○ちゃん」を入れて例話を提示した。子どもの反応は22のカテゴリーにコード化され、各カテゴリーに対して0～3点（理由づけがなされた例話の数）が与えられた。また、援助を求めている人に対してよりも、主人公の利益のために行動しようとした回数を示す“行動得点”が0～3点の範囲で各子どもに与えられた。データを2（性）×2（状況：自分自身対第三者）の多変量分散分析と単変量分散分析により分析したところ、多変量分散分析では、状況の効果のみが有意であった。単変量分散分析の結果、自己状況を提示された子どもは、他者状況を提示された子どもに比べ有意に快楽的理由づけをより頻繁に用い、要求志向的理由づけは少なかった。さらに、“行動得点”の単変量分散分析から、他者状況の子どもの方が「主人公は助けるべきだ」と主張する傾向がみられた。

以上の結果から、仮説的ジレンマの主人公を被験者自身にするか第三者にするかという操作により、道徳的判断が変化することが明らかとなった。そこでEisenberg-Berg & Nealは、この変化を生起させたメカニズムをさらに検討するために、同じ論文の中で引き続き実験を行なっている。彼女らは、自己状況での反応が他者状況に比べて低い段階の道徳的判断となる理由として、(1)子ど

もの自己中心性と、(2)他者の要求を感じる能力の低さの2つを仮説として設け、どちらの説明が正しいかの決定を試みた。すなわち登場人物を自分自身と第三者とに操作すると同時に、援助のための損失をも操作し、子どもが他者の要求を感じる力が単にないのであれば、援助のための損失にかかわらず自己状況ではより快楽的な、より要求志向ではない理由づけを用いるはずであるという論理を展開した。この実験には、45名の未就学児（男子24名、女子21名、平均4歳5ヶ月）と82名の小学1年生（男子37名、女子45名）が参加した。用いた3例話と主人公の操作は先の実験同様であるが、加えて子どもの約半数には例話の中で援助のための損失を減じた。例えばある例話での高損失群の子どもは、もしけがをした子どもを助けると誕生パーティの食べ物やゲームがまったくふいになるが、低損失群の子どもはいくらかを失うだけである。各年齢ごとに子どもは4条件（高損失自己状況、低損失自己状況、高損失他者状況、低損失他者状況）のうちの1つにランダムに振り分けられた。子どもの反応は実験1と同様に22のカテゴリーにコード化され、各カテゴリーに対して0～3点が与えられた。こうして得られたデータの快楽主義と要求志向の2つの理由づけカテゴリーに対して、2（年齢）×2（主人公）×2（損失）×2（性）の多変量分散分析が行なわれた。結果は年齢の主効果、損失の主効果が有意であった。さらに、年齢×損失、主人公×損失の相互作用には有意に近い傾向がみられた。単変量分散分析の結果から次のことが言える。①年齢の高い子は低い子に比べて快楽的な理由づけをより用いず、要求志向をより用いる。②高損失群の子どもは低損失群の子に比べて、快楽的理由づけをより用い、要求志向をより用いない。③年齢の高い子は低損失条件のもとで低い年齢の子より快楽的でなく、より要求志向的である。また、高損失条件ではより快楽的理由づけを用いなくなる。④高損失条件のもとで自己状況の子どもは、他者状況の子どもより快楽的理由づけが多く、要求志向の理由づけが少なかった。

すなわち高損失時には、実験1と同様に他者状況よりも自己状況において、より快楽的理由づけが用いられ要求志向が用いられないという結果が得られたが、低損失時には自己状況・他者状況の操作が効果をもたないことから、他者の要求を感じる能力がないとは結論できない。実験1, 2の結果から、子どもの理由づけは、仮想的ジレンマが自己状況か他者状況かによって変化すると同時に、例話に示された損失の程度といったジレンマの特殊な要因によっても変化することが明らかとなった。

次に、被援助者の特性がプロソーシャルな道徳的判断や理由づけに影響を与えるかどうかを検討した論文、

Eisenberg (1983) を紹介しよう。これまでに、年齢・性・社会階層・友だちの程度というような被援助者の特性が援助者である子どもの理由づけに影響を与えていることが研究されてきた。この研究では、被援助者と自分との関係（家族・友だち……）と類似性、人種、宗教に焦点が当てられ、これら被援助者の特性が理由づけに与える影響を、被験者の年齢やプロソーシャルな道徳的判断のレベルとの関わりの中で検討することを目的としている。被験者は125名の小中高校生（2, 4, 6, 9, 11年生）であり、プロソーシャルな道徳的判断の面接が4例話について行なわれた。被験者が理由づけを終えた後に、決められた順序で付加的な質問——「助けを求めている人が次のような人だったら主人公はどうしただろうか」——がなされた。そして(a)家族、(b)友だち、(c)嫌いな人、(d)よく知らないが同じ町の子、(e)前に見たことがあるが知らない誰か、(f)異なる人種、民族、宗教集団に属する人、(g)異なる国の誰か、(h)犯罪者、が提示される。主人公の性は主人公が単独である3例話中2つで変化させ、被験者は2例話で自分と同じ性の登場人物の例話に反応する。子どもの理由づけおよび様々な被援助者に対する差別傾向という2種類の情報がコード化された。

以上の手続きにより得られたデータから次のことが言える。①学年と被験者の差別との相関はすべて有意であり、差別は年齢とともに減少する傾向にある。②一般に道徳的判断のレベルが高くなるにつれて差別傾向は減少する。③同年齢の子どもの間にも差別の内容に個人差があるか否かを小・中学生別に検討した結果、小・中学生とも「家族と友人対その他」「好き対嫌い」は他の差別よりも使用頻度が有意に高いことがわかった。より年少の子どものみでは、「好き対嫌い」得点は「家族と友人対その他」よりも有意に高かった。

この研究の結果から、子どもは被援助者に対して色々な差別を行っており、その差別は年齢とともに変化すると結論できるであろう。一般に、自分との関わり（家族や友人）、好き嫌い、被援助者の道徳的特性（犯罪性）等は子どもの理由づけ決定に強い影響を与えるようである。ほとんどの差別は年齢とともに減少するが、好き嫌いや犯罪者かどうかは特にその傾向がみられた。さらに、子どもの年齢を統制しても、高いレベルの道徳的判断を示す子どもは低いレベルの子より被援助者の特性にもとづく差別の頻度が低かった。これらの知見は、より高いレベルの理由づけをする人はより一貫してプロソーシャルなやり方で行動するはずだという仮説と一致する。これは進んだ道徳的判断の人は道徳的行為そのものの価値や他の人への行動結果に焦点を当て、個人的利益や他者への愛着に焦点を当てないからであろう。

3. プロソシヤルな道徳的判断と Kohlberg の道徳的判断との関連について

プロソシヤルな道徳的判断と Kohlberg の禁止に方向づけられた道徳的判断とは、異なる道徳的判断の領域を構成すると Eisenberg は述べているが、実際はどのような関連があるであろうか。彼女は2つの研究の中で、この問題を取りあげている。

まず Eisenberg - Berg (1976) の研究では、中学1年から高校3年までの76名(男子36名、女子40名)を対象に、3問のプロソシヤルな道徳的ジレンマと、Restら(1974)が考察した Kohlberg の道徳的判断の客観的測定法である DIT (Defining Issues Test) の中の2問について調査をしている。2つの道徳的判断の相関係数は.32で統計的に有意であったが、それ程高いものではなかった。このことから、2つのタイプの道徳的判断には類似の過程が含まれており、発達の年齢の変化は似ていることが示された。しかし、この研究で測定されたもう一つの変数(政治的態度)との関連を見てみると、自由主義的な政治的態度との関連で両者は大きく異なっていることが見出されている。

Eisenberg, Lennon & Roth (1983) の研究では、4問のプロソシヤルな道徳的ジレンマと Kohlberg の面接法における道徳的ジレンマのうちの2問を、平均年齢7歳7ヶ月の被験者33名(男子17名、女子16名)* に対して実施している。両者の相関係数は.49で、統計的に有意であった。このことから、プロソシヤルな道徳的理由づけと禁止に方向づけられた道徳的理由づけとは、全く独立であるわけではないと結論されている。

以上2つの研究結果から、プロソシヤルな道徳的判断と Kohlberg の道徳的判断とは、中程度に (moderate) 関連していると言えるであろう。

4. プロソシヤルな道徳的判断と関連する諸要因の検討

Eisenberg は、プロソシヤルな道徳的判断と関連すると考えられるいくつかの要因について検討を加えている。以下それらを順に見ていくことにしよう。

(1) 役割取得能力との関連

Eisenberg - Berg & Roth (1980) は、5歳6ヶ月～6歳9ヶ月の34名(男子18名、女子16名)を対象として、役割取得能力とプロソシヤルな道徳的判断の理由づけとの関連性を検討している。役割取得能力は、Flavell (1968) の seven - picture role - tak-

ing課題により測られた。Spearman の順位相関によると、役割取得能力とプロソシヤルな理由づけには何ら関連が見出されなかった。一般的には4～6歳頃に役割取得能力や共感性の能力が増加し、理由づけに要求志向が増加すると考えられるが、この研究で用いられた seven - picture 課題で測られる技能が複雑であるために、プロソシヤルな道徳的判断との関連が見出されなかったのであろうと考察している。

(2) 共感性との関係

子どもの認知的な役割取得能力(他者の観点の理解)と道徳性発達のレベルとの関係は十分確証されているけれども、感情的な役割取得あるいは共感性(自分自身の感情を他者の対応する感情に合致させること)の役割はまだ明確にされていないとして、Eisenberg - Berg & Mussen (1978) は共感性とプロソシヤルな道徳的判断および援助行動との関連について検討している。共感性は、感情的共感性質問紙 (affective empathy questionnaire ; Mehrabian & Epstein, 1972) によって測られた。また援助行動(奉仕行動)は、2～3週間後に無報酬で1時間にもわたるつまらない課題に自発的に参加してくれるかどうかによって測られた。被験者は、中学3年生、高校2年生および高校3年生の72名(男子35名、女子37名)であった。結果は、まず男子で援助行動の得点が高い者ほど共感性の得点が有意に高いことが示されたが、女子では共感性と援助行動との関連は有意ではなかった。次に共感性とプロソシヤルな道徳的判断のレベルとの関連については、男女とも有意な相関係数が得られた(男子では.43, $P < .01$; 女子では.35, $P < .05$)。このことから、共感性はプロソシヤルな理由づけにおける重要な先行要因であると結論している。

(3) 政治的態度との関連

Eisenberg - Berg (1976) は、プロソシヤルな道徳的理由づけと社会的・政治的態度、特に犯罪者の人間的な処遇、海外援助、貧しい人への福祉などに関連した態度との関係について検討している。政治的態度は、Mussen, Sullivan & Eisenberg - Berg (1977) による41項目の質問紙により測られた。被験者は、中学1年から高校3年までの76名(男子36名、女子40名)であった。自由主義的態度とプロソシヤルな道徳的判断との相関係数 (.34, $P < .001$) および人道主義的態度とプロソシヤルな道徳的判断との相関係数 (.21, $P < .05$) はともに有意であった。多重回帰分析の結果、プロソシヤルな道徳的理由づけは自由主義的態度の最も良い予測子であった。このことから、プロソシヤルな道徳的コンフリクトは自由主義的な

* 実際にこの調査に参加できたのは30名のようなが、どの3名が欠落したかは論文からは読みとれない。

政治的態度の発達にとってとりわけ重要であると結論している。

さらに, Eisenberg-Berg (1979 a) はこの両者の関係を別のサンプルで検討している。被験者は中学3年, 高校2年および高校3年の72名(男子35名, 女子37名; 平均年齢16歳8ヶ月)であった。男子では自由主義とプロソーシャルな道徳的判断のレベルとの関係は有意ではなかったが, 女子では両者の関係は有意であった (.35, $P < .05$)。

以上のように, プロソーシャルな道徳的判断と自由主義的な政治的態度とは, ある程度関連していることが示されている。

(4) 宗教参加との関連

Eisenberg-Berg & Roth (1980) は, 5歳6ヶ月~6歳9ヶ月の被験者34名(男子18名, 女子16名)を対象に, 宗教参加の程度とプロソーシャルな道徳的判断の理由づけとの関連性を検討している。宗教参加のデータを得るために, 子どもたちの親に子どもの宗教的訓練について質問し, 3点尺度(1=ほとんど訓練しない, 2=ある程度訓練している, 3=よく訓練している)にコード化した。Spearmanの順位相関によると, 宗教参加は要求志向の理由づけと正の有意な相関を示し, 快楽的理由づけとは負の有意な相関を示した。この事実に対して, 宗教的訓練が利他性に関する教えを含んでいるので, そのような訓練を受けた子どもは要求志向の理由づけを多く用い, 快楽的理由づけをあまり用いないのは驚くべきことではないと説明している。ただし, 宗教的訓練が単に望ましい反応の機械的記憶をもたらすのか, 動機づけなどのプロセスにかかわるのかは不明であるとしている。

(5) 学校に対する適性との関連

知能のラフな測度として学校に対する適性とプロソーシャルな道徳的判断との関連を, Eisenberg-Berg (1979 a) は中学3年, 高校2年および高校3年の72名(男子35名, 女子37名)を対象に検討している。学校に対する適性は, 学校の記録からIowa Test of Educational Developmentの得点が入手された。男子ではプロソーシャルな道徳的判断と学校に対する適性との相関係数は有意 (.57, $P < .001$)であったが, 女子では両者の間の関連は見られなかった。この性差について, 青年男子は職業的成功という男性的目標を実現するために学業的達成を奨励されるが, 伝統的な女性役割は学業に方向づけられるよりむしろ対人関係に志向させられているからであると述べている。つまり動機づけの構えにおける差異のために, 学業的技能のテストでの成績は女子の認知的能力よりも男子の知

的能力を正確に反映しており, それ故に女子より男子にとって道徳的判断のレベルと密接に関連しているとの結果が得られているのであると解釈している。

(6) 親の養育実践との関係

Eisenberg-Berg & Mussen (1978) は, 親の養育実践と子どものプロソーシャルな道徳的判断との関連について検討している。親の養育実践はBlock (1965)により考案された91項目のQ分類により測られた。被験者は中学3年, 高校2年および高校3年の72名(男子35名, 女子37名)であった。結果は, 男子では暖かく同情的な母親は共感的な反応の発達を促進することを示したが, 女子では親の養育実践と共感的な反応とは関連がなかった。これは, 女子の方が男子より有意に共感的である事実によるものであると説明している。つまり, 共感性は紋切り型の女性役割の顕著な成分であるために, 女子のほとんどが共感的であるよう社会化されているからであり, 共感性の得点に天井効果が働いて, 親の社会化実践が女子の共感的な能力に影響しないという結果につながったものと考えられている。

この研究に続いて, Eisenberg, Lennon & Roth (1983) はプロソーシャルな道徳的判断の発達を縦断的資料を用いて明らかにする中で, このプロソーシャルな道徳的判断と親の養育実践との関連についてさらに検討を重ねている。被験者は5歳1ヶ月~6歳7ヶ月の16名(男子7名, 女子9名)であり, 母親の養育実践は先の研究と同様BlockのQ分類課題により測定された。結果は, 子どもの成熟した道徳的理由づけの使用は, 非懲罰的養育実践, 非権威主義的, 支持的な養育実践と関連があり, 過度に制限をする養育実践とは結びつきがないというものであった。

また, 6歳10ヶ月~8歳3ヶ月の被験者33名(男子17名, 女子16名)を対象として同様の検討を行なった結果によると, プロソーシャルな道徳的判断のレベルが高いほど, 非制限的, 非懲罰的な養育実践と関連していることが見られた。さらに, 高い道徳的判断のレベルを示した子どもの母親は, 自分子どもが正直であると評価しているが, ことさら子ども中心というわけではなく, 子どもの食事や遊び習慣(特に男子)には関心を持っていなかった。

認知発達理論によると, 道徳的判断は役割取得の経験や自律的な機能 (autonomous functioning) の機会によって高められるので, 権威的な養育実践は道徳的判断の発達を抑制すると考えられる。さらに, プロソーシャルな行動の発達に関する研究は, 支持的で共感的な養育がプロソーシャルな発達と関係するはずである

と示唆している (Staub, 1979)。この研究の結果は、部分的にこれらの仮定と一致していた。従って、Kohlberg流の禁止に方向づけられた道徳的判断やプロソーシャルな行動と関連する養育態度のいくつかは、プロソーシャルな道徳的判断の発達をも促進するのであろう。

(7) 愛他 (援助) 行動との関連

Eisenberg-Berg (1979 a) は、プロソーシャルな道徳的判断と愛他 (援助) 行動との関連について、中学3年、高校2年および高校3年の72名 (男子35名、女子37名) を対象に検討している。愛他行動は、2～3週間後につまらない実験課題に自発的に参加することが求められ、実際にこのつまらない課題をやり遂げたことによって測られた。男子では両者の関連は有意 ($r = .57, P < .001$) であったが、女子では有意ではない ($r = .20, n.s.$) という結果が得られている。

III 自分自身のプロソーシャルな行動についての道徳的判断

1. 自分自身のプロソーシャルな行動についての理由づけに関する自然的 (naturalistic) 研究

Eisenberg-Berg & Neal (1979) は、子ども自身の現実生活での積極的な行動についての子ども自身による道徳的判断の研究が少ないと指摘し、この問題を検討するために自然的研究を計画している。被験者は4歳～5歳3ヶ月の就学前児26名 (男子16名、女子10名) で、12週間にわたって1週に約4時間、顔見知りの成人女性実験者により観察され、質問を受けた。実験者は教室や運動場を動き回り、分配、慰め、援助といった自発的な出来事を観察した。プロソーシャルな行動を観察した時、「なぜそうしたの」というような質問をして、その行動についての子ども自身の理由づけを引き出した。

12週間の間に26名中22名 (男子14名、女子8名) が、プロソーシャルな行動をした (生じたプロソーシャルな行動の数は全部で65、1人につき2～3)。65のそれぞれで引き出された理由づけは全部で80あり、次のカテゴリーに分類された (括弧内は出現率)。(a)権威あるいは罰志向 (0)、(b)快楽的志向 (3.9)、(c)相互利得志向 (14.3)、(d)親愛関係志向 (10.0)、(e)承認および対人関係志向 (4.9)、(f)紋切り型の善・悪志向 (1.1)、(g)大多数のあるいは自然な行動の紋切り型 (0)、(h)他者の要求志向 (24.5)、(i)実際の志向 (24.5)、(j)「したかったから」志向 (“wanted to” orientation) (15.5)、(k)分類不可能な反応 (1.7)。

結果からわかるように、子どもは自分自身のプロソ

シャルな行動を、他者の要求や実際的な考慮ということとで説明することが多かった。相互利得、友情への言及や助けなかったからという説明もなされたが、権威および罰の理由づけは全くなかった。

この結果から Eisenberg-Berg は、自分のプロソーシャルな行動を説明する時、他者の要求へ言及することは、原初的な共感的志向をあわらしていると述べている。要するに、共感的な関心が子どものプロソーシャルな行動をしばしば動機づけているようであると結論している。

2. 自分自身のプロソーシャルな行動と仮想的ジレンマにおけるプロソーシャルな道徳的判断との関連

就学前児におけるプロソーシャルな道徳的理由づけと自然状況での分配、援助、慰め行動との関連を Eisenberg-Berg & Hand (1979) は検討している。4歳～5歳3ヶ月の35名 (男子18名、女子17名) を対象として、6～11週間にわたり2分間の観察を最低70回実施し、自然状況におけるプロソーシャルな行動と社会的交互作用を分配、援助、慰め、社交的行為 (acts sociably) の4つにコード化した。プロソーシャルな道徳的判断の理由づけは、4つの例話を用いて調べられ、7カテゴリー (権威と罰、快楽主義、要求志向、実際の、紋切り型、承認志向、相互利得) に分類された。

結果として、プロソーシャルな道徳的判断の理由づけは、プロソーシャルな行動の様々なタイプと分化的に関連していることがわかった。すなわち、分配行動は快楽主義的理由づけと負の関連を示し、要求志向の理由づけとは正の関連を示した。また、援助および慰め行動は、道徳的理由づけよりもむしろ保育園での社交性と関連していた。さらに、プロソーシャルな道徳的理由づけにおいて、被験児たちは Kohlberg の段階1 を特徴づけている罰および権威の理由づけを用いなく、むしろ快楽主義的理由づけや要求志向の理由づけを多く用いることが明らかにされた。

Eisenberg, Pasternack, Cameron & Tryon (1984) は、プロソーシャルな行為に対する自己帰属と、プロソーシャルな道徳的判断が、プロソーシャルな行動の遂行頻度とどのように関わっているかを検討している。平均4歳5ヶ月の44名 (男子19名、女子25名) を対象として、週に2～3回、15～20分ずつの観察を行なった。行動は、自発的分配、要求されての分配、自発的援助、要求されての援助、教師との社交、仲間との社交、教師への要求、仲間への要求、言語的・身体的な拒否、物を取りあげるの10に分類され各頻度が計算された。自己帰属のデータは、子どもがプロソーシャルな行動をするた

びに、「どうして～したの?」という質問を行ない、その反応を7カテゴリー（権威および罰、快楽的、実際の、他者の要求、親愛関係、承認および対人関係、紋切り型の善・悪）に分類することで得られた。その際、状況を説明するために環境が次の3つにコード化された。(a)要求されて、(b)要求されないが被援助者の必要を受け入れて自発的に、(c)要求されず、被援助者も必要を示さなかったが自発的に。道徳的判断のデータは、4例話を用いて18名の子どもでのみはかられた。このデータは帰属データと同様の7カテゴリーにコード化された。1つの例話に対して各カテゴリーに1～4点が与えられ、子どもの得点は4～16点となった。

結果として次のことが明らかとなった。①子どもは自分のプロソーシャルな行動を、実際的理由づけ、要求志向の理由づけによって説明することが多かった。快楽的理由づけと親愛関係の帰属もまた比較的良好にみられた。②要求された状況と自発的状況での帰属を比較したところ、男子は要求された状況で要求志向の理由づけを有意に用いた。③プロソーシャルな行動の頻度と帰属の関係を検討したところ、自発的援助と実際的理由づけとは有意に正の相関がみられた。また、要求に応じて行なわれたプロソーシャルな行動の頻度は帰属とは関連がなかった。④プロソーシャルな行動の頻度と道徳的判断の関係を検討したところ、道徳的判断での快楽的理由づけは自発的分配の頻度と負の関係がみられた。

従来の研究と一致して、この研究でも子どもは自分が仲間に向けて行なったプロソーシャルな行動を説明するために、実際的な動機と要求に関連した動機を適用した。ただし、今回の結果において現実場面では仮想場面に比べ快楽的理由づけが少なく、実際的理由づけの頻度が高くなることが示された。仮想場面では援助によってもたらされる損失も利益も大きく、実際の問題よりは様々な要因を考慮すると予想される。さらに道徳的判断の研究は、ジレンマ解決中にインタビューしており、現実場面では行為が終了してから理由を聞くのに比べ、意志決定に影響する様々な配慮が反映するはずである。最後に、道徳的判断の研究では、「助けない」と反応した場合にも理由を聞くので快楽的理由づけが自己帰属より多くなるのは当然である、と議論している。

3. 自分自身のプロソーシャルな行動についての判断に影響を与える要因

自分自身のプロソーシャルな行動についての道徳的判断に関する研究の1つとして、Eisenberg, Lundy, Shell & Roth (1985) は援助を求める側が大人である場合と子どもである場合とで援助者の理由づけが異

なるか否かを検討している。この研究の中で彼女らは、まず(a)子ども同士の相互作用と、大人-子ども間の相互作用との質的差異を検討し、(b)子どもが他者の求めに応ずる際の理由づけが対子どもの場合と対大人の場合で異なるか否かを検討している。

被験者は、3歳9ヶ月～4歳6ヶ月の27名（男子15名、女子12名）および4歳7ヶ月～5歳4ヶ月の32名（男子19名、女子13名）の計59名で、10～18週間にわたり週に2～4回約1時間、教室や運動場で観察された。子どもが他の子どもや大人の要求あるいは命令に従った時には、観察者は子どもに「どうしてそのようにしたか」と問い、理由をたずねた。従うことを拒否した回数や質問への拒否も記録された。子どもの理由づけは8カテゴリー（権威および罰、快楽的、直接的互惠性、実際の、要求志向、親愛関係、承認および対人関係、紋切り型の善・悪）に分類され、各被験者は8つのカテゴリーの各々に対して百分率で得点が与えられた。得点は大人のはたらきかけに対してと、仲間のはたらきかけに対しての2組があり、さらにプロソーシャルな場合とそうでない場合とに分けられた。

以上のデータを、2（相互作用の型：仲間か大人か）×2（性別）×2（年齢：4歳6ヶ月以下対4歳7ヶ月以上）の分散分析によって分析したところ、次のことが明らかとなった。①相互作用の型（仲間か大人か）によって異なる、②大人に対してよりも仲間に対して、従うことを拒否しやすい、③大人の要求よりも仲間の要求に対して、プロソーシャルである場合が多い、④年齢および性別では差は見られない。

対大人と対子どもとで理由づけが異なるか否かを検討するために、頻度の見られたカテゴリーについて、2（相互作用の型）×2（性別）×2（年齢）の分散分析が行なわれた。その結果、次のことが示された。①大人からのプロソーシャルな要請に応じた場合、権威および罰の理由が多く用いられる。一方、仲間からのプロソーシャルな要請に応じた場合、要求志向の理由づけや親愛関係の理由づけが多く用いられる。②仲間からのプロソーシャルでない要請に応じた場合は、要求志向の理由づけを多く用い、権威および罰の理由づけは少ない。

次に、要請の型と子どもの理由づけとの関係を検討したところ、①大人のプロソーシャルな要請に従った時よりもプロソーシャルでない要請に従った時、実際的な理由づけを多く用い、要求志向の理由づけはあまり用いない、②仲間からの要請では、プロソーシャルな要請の時、要求志向や親愛関係の理由づけが多く用いられ、快楽的理由づけは少ないことが明らかにされた。

以上の結果は、従来の知見と一致しており、子どもは

仲間の要請に対してよりも大人の要請に対して、権威および罰の理由づけを多く用いると言える。すなわち、子どもは明らかに2つの型の交互作用（子ども同士と子ども-大人関係）を知覚し、異なるものとみなしていると言える。ただし、大人の要請の多くがプロソーシャルでないということが理由づけに差をもたらしているかもしれない、と述べている。また、大人からのプロソーシャルな要請に応じた場合の理由づけとして、権威および罰

が多かった理由として、子どもは大人からの要請を命令として解釈していた可能性がある」と述べている。

以上、これまでEisenbergの研究を主として紹介してきた（表2に年代順にまとめて示した）。このプロソーシャルな道徳的判断の領域では、確かに彼女を中心とした一連の研究が一段と際立っているが、その他に研究が全くないわけではない。そこで、それらを次節で少し紹介することにしよう。

表2 Eisenberg et al. によるプロソーシャルな道徳的判断（PMJ）に関する一連の研究の概要（年代順）

研 究	目 的	被 験 者	測 度	結 果
Eisenberg- Berg 1976	PMJと政治的態度との関連およびKohlbergの道徳的判断との関連の検討	中1～高3の76名 (M36, F40)	<ul style="list-style-type: none"> PMJ 3問 政治的態度の質問紙 (Mussen et al.; 1977) DIT (Rest et al.; 1974) 	PMJは自由主義的態度の最も良い予測子。PMJとKohlbergの道徳的判断との相関は.32で有意。
Eisenberg- Berg, & Mussen 1978	共感性、両親の養育態度とPMJ、援助行動との関連の検討	中2, 高2, 高3 の72名 (M35, F 37)	<ul style="list-style-type: none"> PMJ 4問 共感性の質問紙 (Mehrabian et al.; 1972) 養育実践についてのQ分類 (Block; 1965) 2～3週間後の1時間にわたるつまらない課題への参加 	共感性とPMJの関連は男女ともに有意。男子では援助行動をしたの方が共感性の得点が高かったが、女子では差なし。男子の共感性と母親の養育実践と関連あり。
Eisenberg- Berg 1979 a	PMJと政治的態度、学校への適性、援助行動との関連の検討	中2, 高2, 高3 の72名 (M35, F 37)	<ul style="list-style-type: none"> PMJ 4問 政治的態度の質問紙 (Mussen et al.; 1977) Iowa Test of Educational Development 2～3週間後の1時間にわたるつまらない課題への参加 	PMJと自由主義的態度との関連は、男子ではなし、女子であり。PMJと学校への適性との関連は、男子であり、女子ではなし。PMJと援助行動の関連は、男子であり、女子ではなし。

プロソーシャルな道徳的判断に関する研究展望

Eisenberg- Berg 1979 b	PM Jの発達の検討	小2, 小4, 小6, 中3, 高2, 高3 の125名 (M66, F59)	・PM J 4問 反応を22の moral consideration cate- gories に分類	小学生の反応は, 快楽 主義的, 紋切り型, 承認 と対人関係, 他者の 要求の理由づけが多か った。 紋切り型あるいは承認 志向の理由づけは年齢 とともに減少, 共感的 な理由づけは増加。
Eisenberg- Berg, & Neal 1979	自己のプロソーシャル な行動についての子ど も自身の理由づけの検 討	4歳~5歳3か月の 26名 (M16, F 10)	・12週間にわたる行動 観察で, 分配, 援助, 慰めといったプロソー シャルな行動を示し た子どもに「なぜそ うしたか」と理由を 問う	子どもは自分のプロソー シャルな行動を, 他者 の要求や実際の理由 づけで説明する。
Eisenberg- Berg, & Hand 1979	PM Jとプロソーシャ ルな行動との関連の検 討	4歳~5歳3か月の 35名 (M18, F 17)	・PM J 4問 ・6~11週間の間に最 低70回の2分間の行 動観察	分配行動は快楽的理由 づけと負の, 要求志向 の理由づけと正の関連。 援助, 慰めは, 道徳的 理由づけよりむしろ社 交性と関連。
Eisenberg- Berg, & Roth 1980	PM Jの発達の變化の 縦断的検討ならびに役 割取得能力および宗教 参加とPM Jとの関連 の検討	Eisenberg-Berg, & Hand (1979) のSsの18か月後の 追跡〔5歳6か月 ~6歳9か月の34 名〕(M18, F16)	・PM J 4問	前の研究よりも要求志 向および承認志向の理 由づけを多く使い, 快 楽的理由づけを使わな い。 宗教参加は要求志向と 正の, 快楽的理由づけ と負の関連がある。 役割取得能力とPM J とは関連なし。
Eisenberg- Berg, & Neal 1981	PM Jの例話中の登場 人物が自己の時と他者 の時によってPM Jが 異なるか否かの検討	4歳~5歳1か月の 47名 (M26, F 21) および就学前 児45名 (M24, F 21), 小1, 82名 (M37, F45)	・PM J 3問	登場人物が自己の時, 快楽的理由づけを多く 使い要求志向は少ない。 高損失の条件では, 自 己の時, 快楽的理由づ けが多く使われる。低 損失の条件では, 年齢 により違いが見られる。

Eisenberg 1983	被援助者と自分との関係や類似性がPMJに及ぼす影響の検討	小2, 小4, 小6, 中3, 高2, 高3の125名 (M66, F59)	・PMJ 4問	被援助者の最も重要な特性は、家族や友だち対その他、好き対嫌いの違いである。年齢につれ、この違いによるPMJへの影響は小さくなる。高いレベルのPMJでも影響は小さい。
Eisenberg, Lennon, & Roth 1983	PMJの発達的变化の縦断的検討ならびにKohlbergの道徳的判断および養育実践とPMJとの関連の検討	Cohort1; 7歳7か月の33名 (M17, F16) (Eisenberg-Berg, & Hand, 1979 および Eisenberg-Berg, & Roth, 1980のSs) Cohort2; 5歳8か月の16名 (M7, F9) Cohort3; 7歳11か月の30名 (M18, F12)	・PMJ 4問 Cohort 1 に対してだけKohlbergの例話2問 Cohort 2, 3には養育実践のQ分類 (Block)	7~8歳頃に要求志向の理由づけが増加し、快楽的理由づけが減少する。PMJとKohlbergの道徳的判断とは中程度に関連している。PMJのレベルと非権威主義的、非懲罰的養育実践と関連している。
Eisenberg, Pasternack, Cameron, & Tryon 1984	プロソーシャルな行為に対する自己帰属とPMJとの関連の検討	4歳児44名 (M19, F25)	・PMJ 4問 ・週に2~3回の15~20分の行動観察 (プロソーシャルな行動をするたびに「どうしてそうしたのか」と質問する)	自分のプロソーシャルな行動を説明するのに、实际的、要求志向の理由づけを用いることが多い。自発的なプロソーシャルな行動と自己帰属、PMJとは関連がある。要求に応じたプロソーシャルな行動と自己帰属、PMJとは関連がない。PMJと自己帰属とは関連がない。

<p>Eisenberg, Lundy, Shell, & Roth 1985</p>	<p>被援助者が大人の時と 子どもの時とでPM J が異なるか否かの検討</p>	<p>3歳9か月～5歳 4か月の59名 (M 34, F25)</p>	<p>・10～18週間にわたり 2～4回約1時間行 動観察がされた。他 の子どもや大人の要 求・命令に従った時 「どうしてそうした か」と質問する。</p>	<p>大人からの要求に従っ た行動の32%だけが、 また仲間からの要求に 従った行動の76%がプ ロソーシャルなもので あった。 仲間の要請よりも大人 の要請に対して、権威 および罰の理由づけを 使う。 仲間からのプロソーシ ャルな要請に対して、 要求志向や親愛関係の 理由づけが多く、快楽 的理由づけは少ない。</p>
---	--	---	--	--

IV その他のプロソーシャルな道徳的判断に関する研究

Eisenbergの研究以外で、仮想的なプロソーシャルな道徳的ジレンマについての子どもの理由づけを扱った研究は数少ない。その中でも、3つの興味ある研究を手短かに紹介しよう。

まずLevin & Bekerman-Greenberg (1980) は、分配行動についての道徳的理由づけを、保育園児、小学校2年、4年および6年の各学年男女20名ずつ計160名を対象に検討している。結果として、次の6つの発達レベルが見出されている。

レベル1；道徳的自己中心性による寛大さ (generosity) の欠如

子どもの分配するかしないかの決定は、自分の報酬を堅持したいという願望によって支配されている。

レベル2；直接的、自動的な返報性による寛大さ

子どもの行動は直接的な返報性の実際的考慮に支配されている。返報性は、分配者と被分配者との間の一時的な契約と考えられている。分配するかしないかの決定は、被分配者が過去において類似のことをしてくれただかあるいは将来類似のことをしてくれそうかによってしている。

レベル3；いわゆる「良い子」の道徳性による寛大さ

分配行動の動機は、社会的慣習に一致するいわゆる「良い子」でありたいということ

ある。子どもは、分配することは「いいことだ」とか「礼儀正しいことだ」という規範を無条件で受け入れ、それ以上のことは考慮しない。

レベル4；条件付きの寛大さ

子どもは分配することを、異なった条件では異なって解釈される社会的ジレンマと考える。分配することは、社会的意味を持つていると考えられ、それ故に分配者と被分配者との間の関係に大きく依存していると考えられている。

レベル5；共感性による寛大さ

他者の感情への配慮や共感的な同一化が分配のジレンマの解決に影響している。子どもは被分配者の立場に立ち、友だちを喜ばせたいとか友だちの感情を傷つけないという願望により行動を決める。

レベル6；ポジティブな正義観による機能的な寛大さ

分配することは、人々の間の社会的関係を高めるポジティブな正義の一般的な道徳的価値の派生的なものと考えられる。

これらのレベルはEisenbergのレベルと似ているところがあるけれども、いくつか違いも見られる。これらの違いの一因は、取り扱われている道徳的ジレンマの内容の違い (Levinらの研究では分配行動だけを扱っている) によるものと考えられる。しかし、寛大さ (generosity) の発達過程を考える上でかなり参考となる研究である。

次に、Bar-Tal, Raviv & Shavit (1981) の

研究を紹介しよう。彼らは、4歳～5歳6ヶ月と7歳～8歳6ヶ月の被験者80名（男女半数ずつ）を対象に、援助行動の動機について検討し、次の6つの発達段階を提起している。

フェーズ1；従順——具体的で明瞭な強化

子どもは、要求されたり命令されたりしたために援助行動をする。この要求や命令は具体的な報酬の約束や罰の明白な恐れを伴っている。責任や義務の感覚のためではなく、権威への尊敬のために行動する。

フェーズ2；従順

援助行動の動機は権威への従順である。子どもは自分よりも力や地位の優っている他者の要請や命令に従う。

フェーズ3；内的な主導権——具体的報酬

子どもは具体的な明瞭な報酬を引き替えに受けることを期待して、援助行動を率先して行う。

フェーズ4；規範的行動

社会的な要請に従うことおよび援助することによって社会的な承認を得ることが、援助行動の動機である。

フェーズ5；一般化された返報性

援助行動は普遍的な交換の原理に支配されている。援助行動を統制する調整された体系（regulated system）に気づいており、援助者はいつか誰かに援助されるという暗黙の信念を持っている。援助行動のもとには、返報という社会的契約がある。

フェーズ6；愛他的行動

援助行動を自発的に行い、外的な報酬の期待はなく、援助行動そのものに目的がある。正義という道徳的確信から援助行動をする。

得られた結果から、年少児に比べ年長児の方が有意に高い水準の理由づけをすることが明らかにされている。この研究も援助行動の動機という援助行動の認知的側面を扱っており、興味深いものである。今後、被験者の年齢を幅広くとって、これらの段階がすべて見られるのか、また発達の順序性は見られるのかの検討をしていく必要がある。

最後に、O'Connor, Cuevas & Dollinger (1981)の研究を紹介しよう。彼女らは、小学3年56名（男子23名、女子33名）、小学5年51名（男子24名、女子27名）および中学1年43名（男子29名、女子14名）の合計150名を対象に、プロソシアルな行為の背後にある動機づけについての選好を調べるPRT (Prosocial Reasoning

Test) を考案し、検討している。選択肢は、自己中心的、権威、関係、共感性、返報性、概念的・規範的の6つのプロソシアルな動機をあらわしている。結果として、被験者の半数以上（55.7%）が概念的・規範的な動機（Eisenbergの紋切り型の理由づけに相当する）を愛好し、続いて返報性（17%）、共感性（10%）の順に選好することが示された。また、年長児ほどプロソシアルな行為を説明するのに内的に方向づけられた動機を選好することが見出されている。

以上3つの研究を紹介してきたが、Eisenbergの研究も含めて、子どものプロソシアルな道徳的判断を扱っている研究で共通に得られている知見は、年齢に伴う変化であろう。つまり、年少児は快楽主義的、自己中心的理由づけを多く用い、様々な状況で権威や従順ということに関心を持っている。また、単純な共感的理由づけを用いることもある。そして、年齢に伴って、規範的な、紋切り型の理由づけや明白な共感的理由づけ、対人関係および承認志向の理由づけを用いるようになる。最後には、内面化された価値や規範に関する理由づけを、年長の者のみを用いるようになるのである。

本稿で紹介してきたプロソシアルな道徳的判断の研究は、その多くが1980年以後のものであり、そういう意味でまだ若い活気のある領域であると言える。プロソシアルな行動の発達や維持を理解するためには、プロソシアルな行動の認知的側面の研究は、ことさら重要であろう。こういったことから、今後この種の研究がますますさかんになされることを期待したい。

文 献

- Bar-Tal, D., Raviv, A., & Shavit, N. 1981 Motives for helping behavior : Kibbutz and city children in kindergarten and school. *Developmental Psychology*, 17, 776-772.
- Block, J.H. 1965 The child-rearing practices report. Berkeley, Calif. : University of California, Institute of Human Development.
- Eisenberg, N. 1982 The development of reasoning regarding prosocial behavior. In N. Eisenberg (Ed.) *The development of prosocial behavior*. New York : Academic Press.
- Eisenberg, N. 1983 Children's differentiations among potential recipients of aid. *Child Development*, 54, 594-602.
- Eisenberg, N., Lennon, R., & Roth, K. 1983 Prosocial

- development : A longitudinal study. *Developmental Psychology*, 19, 846-855.
- Eisenberg, N., Lundy, T., Shell, R., & Roth, K. 1985 Children's justifications for their adult and peer-directed compliant (prosocial and nonprosocial) behaviors. *Developmental Psychology*, 21, 325-331.
- Eisenberg, N., Pasternack, J.F., Cameron, E., & Tryon, K. 1984 The relation of quantity and mode of prosocial behavior to moral cognitions and social style. *Child Development*, 55, 1479-1485.
- Eisenberg-Berg, N. 1976 The relation of political attitudes to constraint-oriented and prosocial moral reasoning. *Developmental Psychology*, 12, 552-553.
- Eisenberg-Berg, N. 1979a Relationship of prosocial moral reasoning to altruism, political liberalism, and intelligence. *Developmental Psychology*, 15, 87-89.
- Eisenberg-Berg, N. 1979b Development of children's prosocial moral judgment. *Developmental Psychology*, 15, 128-137.
- Eisenberg-Berg, N., & Hand, M. 1979 The relationship of preschoolers' reasoning about prosocial moral conflicts to prosocial behavior. *Child Development*, 50, 356-363.
- Eisenberg-Berg, N., & Mussen, P. 1978 Empathy and moral development in adolescence. *Developmental Psychology*, 14, 185-186.
- Eisenberg-Berg, N., & Neal, C. 1979 Children's moral reasoning about their own spontaneous prosocial behavior. *Developmental Psychology*, 15, 228-229.
- Eisenberg-Berg, N., & Neal, C. 1981 Children's moral reasoning about self and others: Effects of identity of the story character and cost of helping. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 7, 17-23.
- Eisenberg-Berg, N., & Roth, K. 1980 Development of young children's prosocial moral judgment : A longitudinal follow-up. *Developmental Psychology*, 16, 375-376.
- Flavell, J.H. 1968 *The development of role-taking and communication skills in children*. New York : Wiley.
- Kohlberg, L. 1969 Stage and sequence : The cognitive developmental approach to socialization. In D. Goslin (Ed.) *Handbook of socialization theory and research*. Chicago : Rand McNally.
- Levin, I., & Bekerman-Greenberg, R. 1980 Moral judgment and moral behavior in sharing : A developmental analysis. *Genetic Psychology Monographs*, 101, 215-230.
- Mehrabian, A., & Epstein, N. 1972 A measure of emotional empathy. *Journal of Personality*, 40, 525-543.
- Moore, B.S., & Eisenberg, N. 1984 The development of altruism. *Annals of Child Development*, 1, 107-174.
- 宗方比佐子・二宮克美 1985 プロソーシャルな道徳的判断の発達 教育心理学研究 33, 157-164.
- Mussen, P., & Eisenberg-Berg, N. 1977 *Roots of caring, sharing, and helping : The development of prosocial behavior in children*. San Francisco : Freeman. (菊池章夫訳「思いやりの発達心理」1980 金子書房)
- Mussen, P., Sullivan, L.B., & Eisenberg-Berg, N. 1977 Changes in political-economic attitudes during adolescence. *Journal of Genetic Psychology*, 130, 69-76.
- O'Connor, M., Cuevas, J., & Dollinger, S. 1981 Understanding motivations behind prosocial acts : A developmental analysis. *Journal of Genetic Psychology*, 139, 267-276.
- Piaget, J. 1932 *The moral judgment of the child*. London : Routledge & Kegan Paul.
- Rest, J., Cooper, D., Coder, R., Masanz, J., & Anderson, D. 1974 Judging the important issues in moral dilemmas : An objective measure of development. *Developmental Psychology*, 10, 491-501.
- Staub, E. 1979 *Positive social behavior and morality : Socialization and development*. Vol. 2. New York : Academic Press.
- Underwood, B., & Moore, B. 1982 Perspective-taking and altruism. *Psychological Bulletin*, 91, 143-173.

(1985年8月9日 受稿)

ABSTRACT

A REVIEW OF STUDIES ON PROSOCIAL MORAL JUDGMENT

Katsumi NINOMIYA and Hisako MUNEKATA

The purpose of this paper is to review the studies on prosocial moral judgment. In section 1, the definition and the developmental stages of prosocial moral judgment are described according to Eisenberg (1982).

In section 2 and 3, the serial studies reported by Eisenberg and her colleagues are reviewed from the following points of view.

- (1) The development of the prosocial moral judgment.
- (2) The effect of the story character in the prosocial moral dilemmas on children's moral reasoning.
- (3) The relationship between the prosocial moral judgment and the Kohlberg's inhibition-oriented moral judgment.
- (4) The examination of the factors (role-taking ability, empathy, political liberalism, religious participation, scholastic aptitude, maternal child-rearing practices and helping behavior) which are relevant to the prosocial moral judgment.
- (5) The naturalistic study on children's moral reasoning about their own spontaneous prosocial behavior.
- (6) The relationship between children's reasoning about prosocial moral conflicts and their own prosocial behavior.
- (7) Children's justifications for their compliant behaviors.

In section 4, three relevant researches besides Eisenberg, which investigated children's moral reasoning about hypothetical prosocial moral dilemmas, are reviewed.